

会員紹介：林薫さん

私の略歴



1953年2月21日生まれ。1978年慶応義塾大学大学院修了。海外経済協力基金に入る。最初は調査開発部調査第2課配属の後1980年業務第3部3課（中国担当）。1982年3月から84年3月まで北京事務所駐在。86年9月まで1980年業務第2部2課（インド、パキスタン、中近東担当）。86年10月から翌年9月まで調査開発部開発1課（運輸部門エコノミスト）、その後1990年9月まで業務第2部1課（ビルマ、韓国、中国担当）。1990年9月から1993年9月までニューデリー事務所次席駐在員（ネパール管轄）。帰国後1995年9月まで業務第2部2課長（インド、パキスタン、ネパール担当）。1995年10月から1998年4月まで開発援助研究所援助理論研究グループ主任研究員。1998年5月から1999年9月の海外経済協力基金最後の日まで業務第2部2課長（中国、モンゴル担当）。1999年10月に国際協力銀行に統合されてからは、2003年7月まで開発金融研究所次長。2003年8月から開発セクター一部長になりましたが、部長は半年強で文教大学国際学部教授に転職しました。

海外経済協力基金で実務経験を積んでから学問の世界へ

筆者の最初の海外体験は、1961年から62年まで、父親の勤務地であるビルマに住んでいたことです。8歳から9歳にかけてです。このときに、ちょうどネウインのクーデターが起きました。午後、軍隊がバリケードを町中に作り始め、夜ラングーン大学の方向から銃声と爆発音が聞こえていたことを覚えています。クーデターをこの目で見たというのは稀有な体験かもしれません。

大学学部は法学部、大学院も法学研究科でしたが、専攻したのは経済法で、法律と経済を同時に学んでいました。修士論文のテーマは「米国反トラスト法における状況証拠による共同行為の認定」で、経済理論やエヴィデンスがどの程度、カルテル行為の摘発に使えるかという内容です。大学院からそのまま大学研究者への道を進まないかと指導教授にアドバイスをされたのですが、「人生の前半は黒板を向いて、後半は黒板を背にして」という人生に疑問を感じて修士で就職することにしました。

ある商社から米国反トラスト法の知識が必要な仕事があり人を探している、というような話があって、あてにしていたのですが、就職活動開始（当時は10月）直後に、今年は当

該部門で新規採用をしないことと決まったという連絡を受け、あわてて他の就職先を探しはじめました。その中で海外経済協力基金（OECF）に出会って、幸運にも採用してもらえました。ちなみにもう一つ受けた政府系金融機関は不採用でしたが、そこと OECF が 1999 年に合併し、廊下で私を不採用にした人事担当者によく顔を合わせるようなことがありました。私は覚えていましたが相手は覚えていたかどうか？ 結果として笑える話です。

OECF-JBIC の 26 年間を見てみると、中国（含む周辺国）関係、インド（同）関係、調査関係が概ね三分の一ずつぐらいです。ODA のメインストリームの ASEAN 関係や総務や経理は一度も直接に担当しませんでした。大学への転職はインド在勤時代から考えており、すこしずつ勉強を重ね、帰国後、横浜市大、名古屋大学、神戸大学、慶応大学などで単発講義や非常勤講師の実績を重ね、また論文も書いていました。

2003 年の 12 月の初旬でした。その頃、JBIC や日本政府の ODA 政策にかなり大きな疑問を持つようになっていたところ、部長会でセクター部長としての私の方針をめぐって激論になり、特にある次長（まだ名前は出せません）からボロクソにたたかれて「もう JBIC をやめてやる」と息巻いて帰宅しました。その晩、相当遅くなって電話が鳴りました。OECF の先輩からでした。「神奈川の文教大学で大学院設置に必要な教員を公募しているのだが、条件が合わなくて何回も選考が流れているようだ。君なら条件にぴったりだと思うので応募してみないか」。即決です。すぐ履歴書と業績リストをもっていきました。そして幸運にも採用されました。

従事した仕事の内容

最初の仕事はプロジェクト評価

OECF で最初に配属された調査開発部での仕事はプロジェクトの事後評価でした。担当したのはタイの水力発電プロジェクトです。当時はようやくプロジェクトサイクルの概念が普及しはじめた頃で、評価が重要な仕事という認知は広まっていませんでした。決まったスケジュールがあるわけではなく、自分で主体的に動かなければ何も進まないという仕事を最初に経験できたのは良かったと思います。その成果は「基金調査季報」に 2 回にわたって掲載されましたが、今でも私の書いた論文の中では出来が良かったと思っています。個別プロジェクトの評価に限定するのではなく、タイのエネルギー・セクター全体を見渡して開発戦略を論じたものでした。現在盛んに議論している「持続性」の視点をすでに取り込んでいて、今自分で読み返してみても現在につながる議論を書けていたことに驚きます。そのつながりでエネルギー政策に大きな関心を持ちました。当時、通産省（現経産省）関係者と原発推進の是非について、新橋のビアホールで文字通り口から泡を飛ばして議論

したことがありました。その時は「否」の立場でしたが、現在もそうかという、必ずしもそうではなくて、むしろ社会そのものの持続性に関心を移しています。

派遣留学には選ばれず中国担当、北京事務所へ

1979年2月にOECDは虎ノ門から竹橋に引っ越しましたが、それを機に、夜、飯田橋の日仏学院に通ってフランス語の勉強を始めました。サブ・サハラ・アフリカの開発が今後もっとも世界的に大きな課題になるからだろうと思ったからですが、自分の世界を広げてみたいという動機もありました。当然、フランス留学を希望して人事課にも伝えていました。そこに降って湧いたのが「中国円借款担当課」への異動です。これは大ショックでした。とにかくそれまで中国に関しては良いイメージを持ったことがありませんでした。まだ文化大革命の余韻が残っていました。異動直後の1980年1月JICA開発調査ミッションに加わり、一か月近くかけて中国側から要請されたプロジェクトのフィージビリティを調査しました。すでにどのプロジェクトをとりあげるかは政治レベルで決着していて、言い過ぎかもしれませんが形を整えるための作業でした。中国には「三辺主義（施工しながら設計する、設計しながら修正する、修正しながら施工する）」という考え方があり、A4数枚のペーパーを出してきて「これが可行性研究報告書（フィージビリティ・レポート）です」といったような状況だったので、情報を補足して審査に耐えるFS報告書を短期間でまとめるのが目的でした。

私は6案件あった中の3案件の鉄道分野を担当しました。件数は多いですが、もともと



(写真 1983年7月 秦皇島)

「鉄っちゃん」だったので、「やらせてくれ」とお願いして担当になりました。実際にこの作業はたいへん刺激的でした。プロジェクトサイトへ2泊3日もかかる列車での移動。まだ蒸気機関車が主力で、業務にかこつけて写真をとりました。車窓から見る中国の素顔、冬の極寒の地での人々の暮らし、そして雄大な大陸の風景。

わずか5か月でFSから始まり審査、基金内、政府内での意思決定、借款契約まで済まなければならないスケジュールでしたが、プロジェクトでは費用便益計算まで国際的標準に則って審査を行うことができました。まだ世銀も対中融資を始める前だったので、世界で初めて中国のプロジェクトの経済的内部収益率計算を行ったかもしれません。

中国円借款の盛衰

フランス語の勉強はあきらめきれなかったですが、どうも私は最初から中国駐在要員だったようで、1982年3月、駐在員として北京に到着しました。北京赴任はそういう事情ですから不本意でなかったといえは嘘になります。しかし、北京赴任の前に部内を挨拶周りしたとき、ある幹部から「それは残念だったねえ」と言われたのには正直言って頭にきました。それは他人からは言われたくないです。コンテキストとして基金が中国オペレーションをそれほど重視していない、メインストリームではないということを含意します。中国円借款に対するこのような偏見はその後もしばらくの間感じていました。2年間の駐在中は第1次円借款の進捗を図ることと、1984年からの第2次円借款の準備が主な仕事でした。北京の毎日は、それこそ「青春の北京」で、仕事のほか、シルクロードや旧満州を旅行したり、職住近接をいいことに水泳やテニスをしたりなど充実した毎日でした。そのころ、JICAの事務所に若い女性の駐在員が赴任してきました。またたく間に北京の独身男性陣の憧れの的になりました。今はJICAの理事になられているようです。帰国後も1988年から90年、1998年から90年の2回中国を担当し、また研究所時代も中国の国有企業改革を研究テーマにしていたので、長く中国とのかかわりあいを持つことができました。

北京赴任前に中国経済に関する論文を一つ書きました。中国も開発途上国の一つであり、一般の途上国と課題を共有している、というのが伝えたかったメッセージです。1980年代の中国は共産党幹部や高級官僚の特権が横行していて「人民が主人の国」などという実態はどこにもありませんでした。政府が「ホワイト・エレファント」作りに精を出す途上国と本質的な差はないと思いました。研究所時代の中国国有企業研究は、大学院以来の「法と経済学」を生かして、財産権の機能を中心にして社会主義体制が内包する企業活動と公共政策の矛盾を指摘しましたが、公的位置づけやサポートを与えられた企業もたらすハザードの問題は、2011年3月の福島第一発電所の事故で、日本でも現実となりました。1989年6月4日の天安門事件は民主化への大きなブレーキとなり、いまだに尾を引いています。この事件は中国に対して抱いていた幻想を吹き飛ばしました。しかし、マルコス、スハルト、フジモリ。日本に根強くある開発独裁の擁護論は「暴乱を鎮圧」した中国共産党のロジックと大差はないでしょう。いろいろな意味で中国は日本の鏡でもあります。

対中援助国会議の開催を企てる

1980年代から90年代末にかけて中国に対する経済協力の特徴は、世銀、ADB、円借款とそれぞれ別の機関が交渉や受け入れの業務を行っていたことです。資金協力と技術協力も別々に行われていました。これはドナー側の意思疎通を阻害し、共通の対応を難しくしていました。これは、ドナー側を団結させないという中国側の戦略でもあります。ここに風穴を開けたいと思い、担当課長時代の99年、世銀、ADB、OECDで「援助国会議」の開催を企てました。世銀、ADBとも所長、担当者をはじめ関係者は協力的で、1999年の春、非公

式ながら意見交換の場を持つことができました。ただ、敵は本能寺。OECF 内部でのサポートは殆どなく、むしろ中国側の反応を気にして、暗に「そんな余計なことするな」と言っているようにも見えました。

その頃、OECD-DAC の対日援助審査（ピア・レビュー）で日本の対中援助が槍玉にあげられ、オペレーションの専門性の低さや政策一貫性の問題などが議論になりました。私は当時中国担当課長でしたので、日本の対中円借款を弁護する役回りでしたが、ピア・レビューで突き付けられた批判の大部分は私としては納得できるものでした。そもそも、対中円借款を継続する意味があるのか？ 中国は 1994 年以降、経常黒字が定着しもはや資金調達には困難はありませんでした。また同年の財政改革で中央、地方の財政権限が整理されてから、円借款の実質的な借り手は地方政府になり、中央政府の役割は保証に近くなっていました。地方開発や、環境対策、人材育成などの支援を続ける必要はありましたが、もはや何年間で何千億というパッケージを約束し満額資金支援を行うというような必然性はまったくありません。プロジェクトのフィージビリティを十分見て、その結果金額が積みあがらなくてもいいではないか。外務省にもそのように説明しましたが、このような担当課長だったので、1年3か月でまた研究所に戻る事となったのだと思います。

インド-中国とは全く異なる「民主主義」の世界

1994 年春、中国から帰国して、インド担当になり、すぐインド出張の機会がありました。ニューデリーに深夜到着し、翌朝、目が覚めてドアの下から入れられていたヒンドスタン・タイムズに目を通していました。「あぶない、これをもっていたら逮捕されるかも」と一瞬あせりましたが、「ここは中国ではないのだ」。それほどインドの新聞が自由に政府批判を展開しているのに気が付いたのは新鮮な驚きでした。それ以来、インドのファンになって今日に至っています。インドは 1990 年から 3 年駐在していましたが。この間、劇的な変化がありました。建国以来の社会主義的政策から 1991 年に成立したナラシンハ・ラオ政権がマンモハン・シン蔵相のもとで 1992 年から大胆な経済改革を始めた時期に重なっていたのです。1990 年から 1995 年までインド駐在と担当課長の連続で 5 年間のインド担当の間、植林や河川浄化、貧困対策などの当時としては新機軸。新セクターを取り上げることができました。

インドは中国と違って「法治国家」です。たとえば円借款で州政府が導入した資機材がムンバイの港で関税が払えずに留置されている。関税は円借款対象とすることはできない。このような状況で、円借款の受け入れ窓口の財務省に「州政府の払うべき関税を免除できないか？ 財政上は右のポケットから左のポケットにお金を移すような話ではないか」と

申し入れたところ、財務省の回答は「趣旨はよくわかるのですが、州と中央の財政権限は憲法に明確に書かれており、それをするためには憲法の改正が必要なのです」。

中国が「合目的性」を重視するのに対し、インドは「法的安定性」の維持が至上命題です。もちろんインドでも担当者の裁量にゆだねられる部分は大きいですが、法的安定性、法治主義の貫徹はガバナンスの基本です。インドの NGO には「権利ベースアプローチ」を重視するところが増えてきています。貧しい人々の人権や、法律上当然に要求できる福祉や給付を適切に確保できるようにするアプローチですが、これができるのは「法の支配」が確固としてあるからです。

ネパール・アルン III 水力発電プロジェクト



写真：1991年 ネパール ポカラ

インド駐在時代にネパールには十数回行きました。一回アンナプルナ山域でトレッキングに行った以外は、世銀、ADB、ドイツとのこの協調融資プロジェクト関係の仕事でした。エベレストにも程近い渓谷に水力発電所を建設する計画は国際 NGO から強い批判を受け、国内外で反対、賛成両派の論争が高まりました。ネパールは電力が圧倒的に不足していましたので、発電所の建設は急務でした。一方で、建設に伴う自然破壊やネパールの経済規模からいって大きすぎる投資額など多くの争点がありましたが、上流に氷河湖があり地球温暖化で決壊の恐れがあることが決定的で、プロジェクトは中止に至りました。5年以上この計画を担当したことは大型インフラ建設のベネフィットとコスト・リスクを考える大変良い機会になりました。大型システムより小規模分散型システムの方が途上国の現実にも合致していると思います。このテーマは2011年3月に東日本大震災を経て「持続可能な開発目標」の問題として、引き続き研究を行っているところです。

インド駐在時代にネパールには十数回行きました。一回アンナプルナ山域でトレッキングに行った以外は、世銀、ADB、ドイツとのこの協調融資プロジェクト関係の仕事でした。エベレストにも程近い渓谷に水力発電所を建設する計画は国際 NGO から強い批判を受け、国内外で反対、賛成両派の論争が高まりました。ネパールは電力が圧倒的に不足していましたので、発電所の建設は急務でした。一方で、建設に伴う自然破壊やネパールの経済規模からいって大きすぎる投資額など多くの争点がありましたが、上流に氷河湖があり地球温暖化で決壊の恐れがあることが決定的で、プロジェクトは中止に至りました。5年以上この計画を担当したことは大型インフラ建設のベネフィットとコスト・リスクを考える大変良い機会になりました。大型システムより小規模分散型システムの方が途上国の現実にも合致していると思います。このテーマは2011年3月に東日本大震災を経て「持続可能な開発目標」の問題として、引き続き研究を行っているところです。

開発教育者・研究者の道へ転身

2004年4月、前述の経緯により、文教大学に転職することになりました。それから13年。振り返るとやはり大学の教員、研究者の方が、援助機関職員より職業として向いていたということを実感しますが、教えている国際協力は OECF や JBIC での経験から得られたものです。26年間の国際協力の仕事の経験は何物にも代えがたいです。

毎年学生を連れてインドへ

インド担当時代の経験を生かして、大学に移ってからも、夏休みには毎年学生を途上国での実習に連れて行っています。英語を勉強している学生が多いので、インド流の英語に慣れてもらうということもありますが、特に権利ベースアプローチをとる NGO の活動は、学生に学んでもらいたいと思います。ブラックバイトやブラック企業がはびこるのはちゃんと権利主張をしないからです。インド以外にもこれまで、東ティモール、フィリピン、カンボジア、ラオスでも実習を行ったことがあります。最近ではインドで定着しています。インドが実習先として好ましいと思うのは英語の訓練になることと、途上国の低所得の現実を目の当たりにすることができること、さらには急速に発展しているダイナミズムをみることができることです。今年（2016 年）もまた 11 人の学生をインドに引率する予定です。

ミャンマー・学生のボランティア活動支援

OECD のころ、1988 年に一度ビルマに行ったことがあります。円借款債務延滞問題の処理と、工業化 4 プロジェクトへの対処でした。子供の頃住んでいた家はすぐ見つけることができましたが、まったく発展が止まった街の様子は惨憺たるものでした。当時のビルマ政府の対応も頑なで、対話の糸口がありませんでした。このころ、日本の政財界には戦前以来のビルマ・ロビーが残っていました。ネウウィン政権の強権政治には見て見ぬふりをしていました。プロジェクトの入札などへの介入もひどかったです。



国名がミャンマーに変わり、四半世紀。2011 年からテイン・セイン政権による民主化が始まり、2014 年によくミャンマー再訪の機会が得られました。大学の学生ボランティアの指導を行うことになり、さまざまな候補地を探していたなかで、日本国際ボランティアセンター（NICE）の協力を得て、シャン州の山中、パヤタン村で行われているワークキャンプに参加することになったのです。ヤンゴンからバスで 12 時間、さらにそこからインレ湖のボートで 4 時間乗っていくところです。2014 年は下見でしたが 2015 年、2016 年と実際に学生を連れていきました。そこでは、学生たちは人々の物質的には豊かでないながらも、落ち着いて、精神的には豊かな生活について学んでいます。学生は誰もが多くのことをミャンマーから学んだと言っています。持続可能な開発目標（SDGs）は途上国、先進国を問わず、世界全体にかかわる課題です。半世紀以上を経てミャンマーとまたこのような形でかかわりあいができたことは大きな喜びです。ヤンゴンも高層ビルが林立するようになり、発展の息吹を感じます。

東日本大震災被災地支援活動

大学に転職してボランティアの担当をすることとなりましたが、学内の様々な事情で、



しばらくボランティアから離れざるを得ませんでした。しかし、離れている間に国際協力ボランティアに関する多くの学びの機会を得ることができました。ボランティアは言ってみればアマチュアリズムの世界です。しかし、外部者としてコミュニティーに入っていくのですから、国際協力活動としてのボランティアに関してはプロ並みの知識と見識が求められます。2011年3

月の東日本大震災の際は、一市民として支援活動に加わりました。仙台に拠点を置いた「ルーテル教会支援となりびと」に加わり、泥だしやボランティアセンターの補助、支援物資の整理お手伝いなどをしました。本格的に大学のボランティア担当に復帰した2013年以降は、学生のさまざまな自発的活動を支援しています。また、毎年、自分の庭で500本ほどの花苗を育て、被災地のNGOのご協力のもとに、学生、地元の方々と一緒に植えて、さらに学生が被災された方のお話を聞くという活動を行っています。時間がたつにつれ震災を知らない学生もどんどん増えています。語り継いでいくことは不可欠です。

サブ・サハラ・アフリカ

OECDに入った当初のサブ・サハラ・アフリカを担当したいという夢は、大学に転職してから形を変えて実現しました。大学で「アフリカ地域研究」という授業を担当していることもあり、最低年1回はアフリカを訪れています。特にタンザニアでは、ダルエスサラームから車で西に5時間のモロゴロという町に研究協力者がいます。これまで家計調査に協力していただいておりますが、今後SDGsに関連した調査、研究を展開していきたいと考えています。この方は教会の牧師さんですが、貧しい女性の自助グループを支援していて、私も日本でその製品の販売を受託し、学園祭や教会のバザーなどで販売するなど活動の一翼を担ってします。ただし、毎年赤字を出し続けています。このほかケニア、ウガンダ、エチオピア、ルワンダ、ザンビア、ガーナ、セネガルなどをめぐり、インドと比較しつつ、貧困削減のアプローチを考えているところです。

Global Development Network (GDN)

Global Development Network (GDN) は1999年に世銀が起ち上げた、開発に関するネットワーク活動です。JBIC時代に研究所の次長として本件を担当したときからかかわっています。開発に関する知識の創造、共有、人材の育成、政策と研究の橋渡しなどをミッションとして17年続いてきました。当初はICTの発展をキャプチャーすることに主眼が置か

れていましたが、最近では途上国の政策研究人材の育成に重点がシフトしています。この仕事だけは転職しても追いかけてきました。2014年まで JICA の顧問として GDN の担当をしてきたほか、2010年からは GDN 本体の理事も引き受けています。毎年1回の年次総会と理事会と出席し、特に後者において意思決定に参画するのが大きな役割ですが、フランソワ・ブーギニョン（元世銀チーフエコノミスト）、ラヴィ・カンブール（元世銀エコノミスト、「世銀の半世紀」主筆）、アラン・ウィンターズ（元世銀、DfID チーフエコノミスト）、アビシット・バナジー（MIT インパクト評価の第一人者）などという錚々たる学者とともに理事会に席をならべることは、緊張はしますが、大変光栄なことです。証拠に基づく（evidence based）政策形成は日本にとっても重要な課題です。研究者としても研究とその政策への適用に貢献していきたいと考えています。

今後の研究テーマ

研究テーマはいろいろと変遷してきています。法と経済のアプローチによる国有企業研究、公共財政管理、地域開発、援助政策、NGO と権利ベースアプローチなどの調査、研究をこれまで行ってきましたが、今は SDGs の研究にシフトしています。SDGs の研究に関しては科研費対象の共同研究の一翼を担えることになりました。特に持続可能性を資源の面から考えるテーマに着手したところです。GDN に関連した「開発におけるネットワークング」については本にする予定です。また「国際開発政策論」の教科書を執筆しています。

仕事上の苦勞と喜び

仕事上の苦勞は、まず自分の性格によるもので、根気がないことによって生じるさまざまな問題です。コツコツと地道に積み上げていくのが苦手で、研究テーマが拡散してしまってコアがない状況を作り出しています。几帳面さもなく、計算も不正確で、若いころはプロジェクトのコスト計算を間違えたりして、上司に怒られ、同僚にも迷惑をかけました。ただ、この欠点はパソコンが普及して、ロータスやエクセルなどのスプレッドシートが使えるようになってからは問題にならなくなりました。

組織人としては、はっきり言って落第です。OECD 時代、特に最初の10年間は組織人としてやっていけるか、自分でも自信がありませんでした。組織の力学や利益を考えて行動するなどには全く能力の範囲外でした。しかし、この欠点があったため、総務や人事などに配置されず、現場に近いところで仕事ができることにつながったと思います。10年を過ぎたあたりから、「バランス感覚がない」というマイナス評価と「特定の仕事はできる」というプラス評価をうまく操ることを学習してしまったと思います。確かにこういう人物を置いておくことができるのは研究所くらいでしょう。

喜びは、とにかくいろいろな方に出会えたことです。また、さまざまな世界の出来事に当事者としてかかわりあえたことだと思います。

私の生き方

「私の生き方」といえるようなものはないのですが、自由でありたいと思っています。特にイデオロギーといわれるものからは離れていることをプリンシプルにしてきました。できるだけバイアスなしでものを見たい、ファナティック（熱狂的）な感情にとらわれたくない、というようなものです。組織人としては落第だったと書きましたが、日本の組織にありがちな過度の帰属意識の強要がファナティックに思えて嫌っていたためだと思います。ちなみに野球もサッカーも最頂にしているチームはありません。大学に移ってからも、学生には、自分の頭で考えるように、先生の考えに合わせるという発想はしないでほしい、既存の言説にたよらず自分でデータをチェックしてほしい、というような指導をしています。

上に述べたことと多少矛盾するかもしれませんが、フィロソフィーとしては「普遍主義」です。「歴史主義」、「ナショナリズム」などはご免こうむりたいと思っています。これまでも、援助の国際協調の側に立ち、ODA が国益にどんどん囚われていくのを暗澹たる思いで見してきました。GDN の仕事を続けてきた理由もここに 있습니다。グローバルな市場経済に関しても決してアンチではありません。ただ、ピケティのいうように金融経済化で貧富の差がどんどん拡大していくのは何とか食い止めなければならないと考えています。

ルール違反に対しては厳しいですが、「自然法思想」がベースなので、合理性のない悪法には従う必要がない、ということもかなりはっきりしていて、周りからは矛盾していると思われるかもしれません。暴力的なもの、傲慢なものも嫌いですし、権威や権力が背後にある場合にはなおさらです。石原慎太郎や橋下徹は一番嫌いなタイプです。特に後者はその「反知性主義」に耐えられません。しかし、自分がかなり傲慢だなあとすることがあっていやになります。

好きな言葉があります。

God grant me the serenity to accept the things I cannot change, courage to change the things I can change and the wisdom to know the difference.

神様、変えることができないものを受け入れることができる落ち着きと、変えることができるものを変えるための勇気と、そして、変えることができるものとできないものを見分ける知恵を与えてください。(Reinhold Niebuhr ラインホルト・ニーバー 1934)



ミャンマー インレー湖 1962年11月



同 2015年3月